

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは、問十二以外は黄色の解答题用紙に記入すること。問十二の答えは国語B—三の解答らんに書きなさい。

日本の闇はやわらかい。それは視覚的なことだけでなく、^{注1}モイスチャーな闇は目を閉じてても、肌にもやわらかい。

前に述べたように、梅雨(旧暦五月)の暗く厚い雲が星明かりすら完全にさえぎる深い闇を、五月闇という。五月闇は深いけれど、とてもやわらかい。螢の光が美しいのはその背景が五月闇だからだ。梅雨のモイスチャーな空気に包まれて、闇も螢の光もやわらかい。小川や田んぼの水面に反射する螢火は、さらにやわらかい。深くやわらかい闇にほのかな光が明滅するからこそ美しい。

日本力オクの照明は、五月闇と螢火の深さとやわらかさに似ている。

螢の光は火のように揺らめく。光は単に弱ければやわらかくなるのではなく、おだやかな揺らめき加わってやわらかくなる。光が揺らめくというのは、光と闇が交ざり合うということだ。光と闇の両方の存在感が際立ちながら、光も闇もやわらかくなる。

反射光はわずかな角度の変化によって光りぐあいがすぐ変わるから、火の揺らめきに似た効果がある。とくに水面に映る光はやわらかい。だが今は、ほのかな光の反射に心を配ることなどほとんどなくなり、^{注2}行灯や和蠟燭の揺らめく光もほぼ駆逐されてしまった。

和風の宿や店などへ行けば、今も行灯風の照明器具に出会うが、火ではなく電気の光だ。光が揺らめかないのでまるで違う。^①道具の外観は似ていても、光自体は似ても似つかない。電気の光はのつぺりと平たく、闇と絡まない。奥行きがない。こんな平板な景色を毎日見ていると、人生も平板なものになりそうだ。

このつぺりと平たい光が、私たちにそうとうストレスを与えているはずだということは、油火や和蠟燭の火を体験したときの心地よさから、容易に推測できる。

屋外の灯火具に(A)を転じよう。行灯などが普及して江戸時代の夜を照らしたが、それはあくまで家の中の話。カンパンの役目を持った「掛け行灯」や街路を照らす^{注3}灯籠形の「辻行灯」などもあったものの、灯火は基本的に家の中を照らして、町全体を照らすことはなかった。江戸の夜は明治以降とは比較にならないほど暗かった。

街灯のない江戸時代は、提灯で道を照らして歩いた。小泉和子『道具が語る生活史』によれば、明治に入ってから、和蠟燭より安価で手軽な西洋蠟燭の大量生産とともに、本格的に提灯が普及した。だから、街灯の時代になっても提灯を持って歩いた。E・S・モースの一八七七年の日記には、人々は月夜でも提灯を持って歩き、カジバですら火消したたちが提灯をかざしているのはこっけいだ、とある。

提灯の光は、どうしてそんなに愛されたのだろう。

夏の夜、提灯を持って散歩するツアー「^{注4}谷中妄想カフェ」うちようちんもってちよつとそこまで」に参加してみた。参加者全員にぶら提灯が貸し出され、西洋蠟燭一本の灯りで明るい東京の街を歩きます。提灯を持ったスタッフがあちこちにてツアーを演出するのがいい。

向こうで提灯がゆらゆらふらふらしていると、光る□のようにも感じられ、なんとも怪しい。^{注5}本所七不思議のひとつ、「送り提

灯」を思い出した。夜道を歩いていると、だれもないのに提灯だけが現れて送ってくれるという話。そんな、本所七不思議の時代の気持ちかわかる。

提灯散歩の集団はハタから見るととても目立っている。東京の夜は明るいのに、蠟燭一本の提灯の光は意外に目立つ。道を照らす道具としては意味がなくても、その光自体は充分目立つので意味がある。

明治の初めのころ、料理屋では客が帰るときに店の名入りの提灯を持たせたという。今なら、店やブランドのロゴ入りの紙袋を持たせるが、提灯はその紙袋が発光しているようなもので、広告としても目立つ。

それに、提灯を持って歩くだけで心が華やぐ。道を照らすというより、自分をライトアップする、いや、自分が光っているという感覚だ。今、子どもが光るプレスレットを着けて喜ぶ感覚に近い。

②実は「月夜に提灯」もありなのだ。

木々が繁る闇夜の山を歩くと、今も江戸時代のように真つ暗だが、明るい懐中電灯をパツと点けて歩けば、だいぶ先までしっかりと照らせるから、昼間に近い感覚で速く歩ける。提灯のささやかな光では遠くまで照らせないから、自然にホチヨウが遅くなり、夜の景色を丁寧に味わう気持ちが生まれる。提灯や行灯(初めはその名のおり、携行灯火具だった)、手燭などは、心をしずめ、ペースを落とす道具として機能する。

暗ければ暗いほど、見通しが利かずスピードは落ちる。明るければ明るいほど、はるか先まで照らせてスピードが速くなる。とんでもなく強力なヘッドライトで照らすから、夜でも車をどんどん飛ばせる。暗いと遅い。明るいと速い。

家も全部明るければ昼のようにさっさと行動できるが、それは身の回りのものと雑に接することにつながる。闇の中ではゆっくりと丁寧にものと接する。

^{注6}市田邸では前述した闇飲みもやってみた。暗闇でいろんなジュースを飲んで、それがなにか当てる。やっているうちに、まずコップを掲げて丁寧に匂いをかぎ、それから一口ゆっくり味わう。一呼吸おいてもう一口、丁寧に。というように、^③なんだかお茶の作法のような型が自然にできあがっていく。

逆にいえば、お茶の作法はまるで闇の中の所作のようだ。武道の所作にしても、技を繰り出す一瞬は素早い、それ以外はゆっくりと静かで、暗い場での戦いが基本になっている気がする。やはり日本の文化は、日本のやわらかい闇の中でつちかわれてきたのだと思う。

^{注7}松明から始まった携行灯火具だが、今はケータイ、スマホの液晶バックライトが、手軽な手火の役割を果たす。暗い山道をケータイの光を頼りに歩いてみると、懐中電灯を使うよりグツとスピードが落ちる。とはいえ、液晶の光で充分歩ける。本来、照明器具ではないから現代の道具らしくない暗さだが、その偶然をいかして、この程度の光で機能することを大切にしたい。

前述したように、江戸時代の街路には基本的に灯りはなく、夜になると江戸の町は闇に沈んだ。日本にガス灯がやってきて一八七一

七二年に初めて街灯が点く。ガス灯は街路という街の**コツカク**を光らせ、夜の街全体を光らせる時代をひらいた。石油ランプの街灯も「ガス灯」として登場したりしたが、ガス灯、石油ランプの後を追うように電灯がやってきて、屋外も屋内もあつという間に電灯が**注8** 席巻した。

だが、街全体が発光しているということは、夜の家におもしろい効果をもたらしてくれる。闇夜の市田邸で、雨戸を閉てずにすべての灯りを消してみた。

昔の闇夜なら座敷はほぼ真っ暗になるところだが、今はすごい。前のビルの灯り、街灯、信号などなど。庭木越しにさまざまな方向から光がやってきて、**障子**や壁に木や竹の影が映り、縁側の床板に反射し、あるいは塀の上から、出立ての月のように低い角度で射し込む。軒が深いから都会の空の光は直接入らないが、庭に反射して座敷に届く。高い塀や庭木がかなり遮光しているというのに、座敷が驚くほど明るい。針の穴にいくらでも糸を通せる。

門の木戸が少し開いていて、そこから前の道路を通る車のヘッドライトが射し込んで、障子に映る光と影の動きがとてもおもしろい。門が映写機、障子がスクリーンになっている。この効果を計算に入れて、塀にわざと**注9** スリットを入れるのもいい。わざわざ自分の家の照明を点けなくても充分明るい。**④** こういういわば「もらい灯」を計算に入れて家を建てるのも、銀閣、**注10** 桂離宮など月光を計算に入れた建築のようでおもしろいだろう。

江戸時代からの灯火具の進化について見てきたが、日本のあかり博物館には灯火の明るさ比較の体験学習室がある。行灯、雪洞、石油ランプの順に点灯するとどんどん明るくなるが大差はない。だが、最後の六十ワット白熱電球が点くと、「うわっ」と腰を抜かすほどの爆発的な光！ それまでとはまったく別次元の明るさだ。部屋のすべてのものに等しく光が行き届き、部屋の隅々まで昼間になる。明治の人たちが初めて電灯の明るさに接したときの驚きと興奮と**注11** 恍惚を、疑似体験した気分だ。

太平洋戦争後に普及した蛍光灯は、さらに徹底的に等しくすべてのものを照らし出す。この灯りが、**⑤** すべてを等価に見る意識、醒めた目でものを見る感性を養ったようにも思え、それはそれでいいと思う。だが、行灯の灯りで針の穴に糸を通したあと、電灯が点いて明るくなった博物館でやってみたら、なかなか糸を通せない！ 手こず

問一 本文中の**カタカナ**は漢字に直し、**漢字**は読み方ををひらがなで書きなさい。

問二 次の本文中の漢字二字の熟語のうち、その組み立てのちがうものを一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) ア 紙袋 イ 道路 ウ 街灯 エ 山道
(2) ア 基本 イ 変化 ウ 存在 エ 発光

問三 ① 道具の外観は似ていても、光自体は似ても似つかない とありますが、次の文は行灯や和蠟燭と、電気の照明器具とのちがいを説明したものです。(1)と(2)にあてはまる言葉の組み合わせとしてもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

行灯と和蠟燭は (1) を感じるが、電気の照明器具は (2) を感じる。

- ア 交ざり合う光で、奥行きのあるさ
ウ 交ざり合う光で、ストレス
オ 揺らめかない光で、平板さ
イ 揺らめく光で、やわらかさ
エ 交ざり合わない光で、美しさ
カ 変わらない光で、心地よさ

ってからやつと通せた。もう一度やってみると、やっぱり行灯の暗い灯りでやるより手こずる。学芸員の見波さんも言っていたが、まわりが見えすぎて集中しづらいのだろう。

それはデスクワークにもいえる。明るくてまわりも等しく見えすぎると、仕事に集中しづらい。つり橋で、明るくて下がよく見えると**(B)** がすぐんで渡ることに集中できないのも、同じようなことだろう。

デスクワークをするには、部屋が暗いとはかどらないし、目に悪い。そういわれてきたが、そんな単純なことではないだろう。

⑥ 光の中にうまく闇を探りこむ採闇の技術が、仕事をはかどらせるのではないか。

博物館や市田邸での暗闇体験が終わって、電灯が点き、すべてが等しく照らされると、空間に中心がなくなる。部屋のどこにいても同じだから、火のまわりに集まっていた人は散っていく。

昔は火のまわりに人が集まった。囲炉裏は煮炊きなどの調理と暖房のイメージが強いが、光源でもあった。夜の闇が家の中に満ちると、炉端だけが明るく、そこに家族が集まった。家の中から闇が消えて全部明るくなると、家族は散り、団欒は生まれにくい。

夜が昼のように明るいことこそ豊かであるという二十世紀的価値観は、むしろ貧しい。夜を明るくできるのに明るくしないこと。それは昔に帰ることではなく、未来へ行くことだ。**⑦** 新しい暗さの中にこそ、豊かな未来が見えてくる。

【注】

(中野純『闇学』入門)

- 1 モイスチャー：湿度が高い様子。
- 2 行灯：油に火をともして部屋を明るくした道具。
- 3 灯籠：石などでできた明かりをともしもの。
- 4 谷中：東京都台東区にある地名。
- 5 本所：東京都墨田区にある地名。
- 6 市田邸：市田氏の古い邸宅で筆者が暗闇体験をしたことを指す。
- 7 松明：松などを束ねて火をつけ、明かりにするもの。
- 8 席巻する：ものすごいスピードで、至る所を自分の勢力範囲にすること。
- 9 スリット：さけ目、すき間。
- 10 桂離宮：京都にある、昔の天皇の別邸。
- 11 恍惚：うつとりすること。

問四 (A)・(B)に入るのにふさわしい、**からだの一部**を表す漢字をそれぞれ書きなさい。

問五 に入る語として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 蜂 はち イ 蝶 ちょう ウ 鳥 エ バッタ

問六 ② 実は「月夜に提灯」もありなのだ。とありますが、なぜそう言えるのですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 月夜はそれだけで明るいのだが、提灯があると、自分が光っているようで心が浮き立つから。
イ 月夜はそれなりに明るいのだが、時には雲がかかり暗くなってしまうので、明かりを備えておく必要があるから。
ウ 月夜は町を均一に照らしますが、提灯は人の細かい動きに付いてきて、ものを見るのに便利だから。
エ 月夜は古来好まれてきたもので、そこに提灯が加わると、風流に感じて余計に喜びが増すから。

問七 ③ なんだかお茶の作法のような型。とありますが、そこにはどのような特徴がありますか。それを表す言葉を本文中から二つ抜き出して書きなさい。

- 問八 **所作** の語のここでの意味を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 風流なものに接することによる心の落ち着き イ 自分が行動するとき気をつける点
ウ あることをするときのからだの動かし方 エ 限られた条件の中での自然な動き

問九 ④ こういういわば「もらい灯」とありますが、ここでの「もらい灯」の光源は何ですか。同じ段落から十五字以内で抜き出して答えなさい。

- 問十 ⑤ すべてを等価に見る意識。とはどういうことを言っているのですか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 大きいものと小さいものの区別をせず平等に見ること イ 見やすいところも見にくいところも、集中して見ること
ウ 明るいところと暗いところの差をつけずに見ること エ 古いものも新しいものも、愛情をもって丁寧に見ること

- 問十一 ⑥ 光の中にうまく闇を探りこむ探闇の技術。とありますが、これにあてはまるものを次の中からすべて選んで記号で答えなさい。
ア デイナーの時のテーブル上のキャンドル イ 小さな光を頼りにお墓で行うきもだめし
ウ 都会の冬の夜をいろどるイルミネーション エ 夏の夜空に次々と打ち上がる花火
オ リビングルームを照らす間接照明

問十二 ⑦ 新しい暗さの中にこそ、豊かな未来が見えてくる。とありますが、「新しい暗さの中」に生まれる「豊かな未来」とは、どのようなものですか。本文の内容にふれて説明しなさい。答えは左の解答らんに書きなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、読みやすくするために文章の表記を一部改めてあります。)

たのしき新年

あらたしき年のはじめの注一思うどち

い群れて居ればうれしくもあるか

万葉集の中の一「 」です。「あらたしき」は「あたらしき」と同じ意味、「い群れて」は「集つて」とか「寄り合つて」とかの意味であることは、おわかりでしょう。「新しい年のはじめに気の合った友だちが寄り合つて話したり遊んだりするのは、何とうれしく、た

のしいことではありませんか」というだけのことでしょうが、千年以上にもなる者の生活感情の現在のそれとの間の、①あまりにも同

じものが行きかよっているのに、私は感激するのです。たのしい新年と言いながら思うことは「たのし」という言葉の持つ意味です。「たのし」は(手伸し)ですが、思い切つて手を伸ばした形です。前へ前へと押し進む形です。つまり、たのしいというの



は、ただおもしろおかしくふざけまわることではなくて、ほんとうは思い切り手を伸ばして力をふるうことであり、そうすればこそ愉快になるのです。

お正月気分が二月になっても三月になっても抜け切らず、^②お正月のたのしさが心に残っていて、何事も手につかないなどという人があつたら、それは日本語をよく知らない人です。たのしければこそ、思いきり「手を伸ばして」ありったけの力を尽くして、精一杯の仕事をするのが正しい生きかたです。

新しい生活の手帖のページにくだらないことばかり書きつけていくような生活はしたくありませんか。

※

一年の中には雨の日も風の日もあります。けれども、どんな日でも何かしら善いことを新しく思わせない日はないはずで。

何かしら新しい美しさを発見できない日はないはずで。アメリカの有名な教育家が生徒に向かつて、「毎日何かしら一つでよろしいから、美しいものを発見するようにしてごらんさい」と言いました。生徒たちは毎日教室へ来るとまず第一にその前の日に見出した美しいものを報告しました。

青い空、紅い花、芝生に虫をついばんでいた小鳥の羽根の色、仔牛の眼、木の葉のみどり、お母さんのドレスの色、赤ちゃんの手、大理石の像、大きなもの小さなもの、生命のあるもの、生命のないもの、種々さまざまなものの中に、美はありました。

ある日のことでした。一人の少女は学校から帰って夕方まで何か美しいものを一つ探そうとしたのですが、その日の空は^①とくもり、つめたい風が吹き、何一つ美しいものはありませんでした。「あああ、きょうはもう駄目だ。何もきれいなものは見つからない。

明日は先生に報告しなければならぬ。つまらないなあ」

少女はこんなことを考えながら、ぼんやり窓から外を見ておりました。いつ降り出したのか、雨がぼたり、ぼたりと窓ガラスをつたわって流れ落ちていました。

「^③ぼたり、ぼたり、ぼたりん、ぼたり」と、リズムカルに流れ落ちる雨の玉はきらきらと光っていました。

じいっとそれを眺めていた少女の顔がぱつと輝きました。「あら、なんて美しい雨だれでしょう！ ほんとうに露の玉だわ。ああ、きれいだ、私はうれしい。やつときょうの美しいものを探し出せた」

少女は次の日^②とした声で雨の玉の美しさを教室で語りました。

気をつけて眺めれば、どんな日にも美しいものが発見されます。どんな日もたのしいことはあります。一年中、どの日もみんなよい日です。

A 風も吹くなり
雨も降るなり

④ 生きてゐるしあはせは
波間のかもめの如く
びようぼうとただよひ

生きてゐるしあはせは
あなたも知つてゐる
私もよく知つてゐる
花のいのちは短くて
苦しきことのみ多かれど

B 風も吹くなり
雲も光るなり

ある日の^②林芙美子さんからのおたよりの末に書いてあつた詩です。全くの即興詩というのですが、^⑤私はこれをマスケットとして、自分の書齋でいつも読んでいます。

ほんとうに、「風も吹くなり、雲も光るなり」です。吹く風、ただよう雲、その中に美を感じ、よろこびを見いだしてゆく生活を一年中、つづけましょう。

新年の決心というものを、きつとみなさんは書きつづるでしょう。あるかたがたは美しいカードに美しい文字でそれを書き、机の前にかざっていらつしやるでしょう。

しおりに書いてみたり、お友だちへの手紙の中に書いて送ったり、新しい年への私たちの決意は真剣です。それは「初めの日」に対する私たちの情熱なのです。

けれど、あまりに初めだけに気を取られて、連続してゆく生活への興味を失わぬよう、毎日毎日新しい出発の日にすることが出来るのだという^⑥「初め」の連続である私たちの生活ということも考えましょう。

では、愛する少女たちに、新しい年への私の祈りと祝福のすべてをこめて――

英雄しく、たのしく、進んで下さい。

〔村岡花子「新年をめぐって」『ひまわり』一九四九年一月号より〕

〔注〕

^① 思うどち…気の合う者どうし

^② 林芙美子…筆者と交流のあつた小説家

問一 本文中の「^①」には、和歌や短歌を数える時の語が入ります。漢字一字で書きなさい。

問二 ^①あまりにも同じもの とありますが、「同じもの」とはどのような気持ちですか。本文中の言葉を使って三十文字以内で答えなさい。



問三 ②お正月のたのしさが心に残っていて、何事も手につかないなどという人があつたら、それは日本語をよく知らない人です。とありますが、その理由としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「たのしさ」は気のあつた友達に向かつて手を伸ばす動作から生まれた言葉であるが、二・三月になつた頃には友達との関係も変わつてしまい、悩み始めてしまうから。

イ 「たのしさ」は思い切り手を伸ばし、力をふるつて愉快になることであるので、二・三月になつても愉快なままだというのは、やるべきことをおろそかにしたままであるから。

ウ 「たのしさ」は面白さを求めて手を伸ばす動作から生まれた言葉であるので、二・三月になつてつまらなくなつてしまったというのは、ありつただけの力を尽くしているとは言えないから。

エ 「たのしさ」は前に向かつて手を伸ばし、前進することが本来の意味であるので、二・三月になつても気もそぞろだというのは本来の意味を取りちがえていることになるから。

問四 ③ぼたり、ぼたり、ぼたりん、ぼたり とありますが、「ぼたり」と「ぼたりん」のちがいを説明したものととして、もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼたり」は均一に落ちるようだが、「ぼたりん」はリズムをかき乱しているようである。

イ 「ぼたり」は同じ調子で落ちる感じだが、「ぼたりん」は間隔が少しあく感じである。

ウ 「ぼたり」は落ちる速度が速いが、「ぼたりん」は落ちていくのがゆっくりである。

エ 「ぼたり」は自然に落ちる感じだが、「ぼたりん」はわざと落としている感じである。

問五 本文中の 1 2 にあてはまる語としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1	…	ア	じんわり	イ	どんより	ウ	ひんやり	エ	ほんのり
2	…	ア	つやつや	イ	いそいそ	ウ	いきいき	エ	きらきら

問六 ④生きてゐるしあはせは波間のかもめの如く／＼びようぼうとただよひ とありますが、これはどのようなことを意味しているのでしょうか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かもめが波立つ海の上を風にあらわれながらあてどなく飛んでいるように、私たちの生きる上での幸福も移ろいやすく頼りないものであること。

イ かもめが波の荒い海の上でも何とか翼を広げて懸命に空を飛んでいるように、私たちの幸せも訪れる危機を切り抜ける中で生まれるものであるということ。

ウ かもめが波の間をすり抜けつつも海から離れないように、私たちの幸せも今すぐしている居場所から離れては、見つけれないということ。

エ かもめが波の間の風に身をゆだねてただよっているように、私たちの幸福も今の状況に身をまかせているうちに自然とやってくるものだということ。

問七 A 風も吹くなり B 風も吹くなり の二つの「風」は、この本文の筆者にとってそれぞれどのような「風」だといひですか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 築いてきた互いの愛情を吹き消すようなもの

ウ 本来備わっている人間味のぬくもりを冷やすもの

オ 困難な状況でも力強く背中を押してくれるもの

問八 ⑤私はこれをマスコットとして、自分の書齋でいつも読んでいます とありますが、「マスコット」の表すものとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもっぽいと思ひながらも、気に入って捨てられないもの

イ 宝物のように大切にし、他人の目にふれないように秘めておくもの

ウ 宝物のように大切にし、他人の目にふれないように秘めておくもの

問九 ⑥「初め」の連続である私たちの生活 とはどのようなことをする生活ですか。自分の言葉で説明しなさい。

問十 ※ に入る小見出しとして、もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みんなよい日

イ 元旦こそ希望

ウ 愛する少女たち

エ 命あるもの

国語B

二〇一七年度 東洋英和女学院中学部 入学審査解答用紙B

受験番号

写

氏名

一

問一

カオク

カンバン

カジバ

ホチヨウ

コツカク

障子

問二

(1)

(2)

問三

1

2

問四

A

B

問五

問六

問七

問八

問九

15

問十

問十一

問十二 答えは

国語一三

の解答らんに書きなさい。

二

問一

問二

30

問三

問四

問五 1

2

問六

問七 A

B

問八

問九

問十

